

近代群馬 県都前橋の父の碑を訪ねて

2015（平成 27）のNHK大河ドラマ「花燃ゆ」に登場した初代群馬県令楫取素彦翁について調べてみると、関係する碑が担当地区の桃井地区大手町一丁目高浜公園に建立されていることが分かり訪ねてみました。

碑は120年余の星霜を経て一文字一文字の判読は直ぐには出来ませんでした。楫取翁の功德とあいまって木漏れ日に写し出され輝きを放っていました。

前群馬県令楫取君功德之碑は、群馬県の産業、経済、教育振興、文化財保護などに貢献した楫取翁の元老院への転任のうわさが流れると、前橋の県庁誘致に活躍した有志達を中心に留任運動が起き、1883（明治16）年に転任するとの知らせが伝わり、翌年群馬を去るときには、数千人が沿道に出て別れを惜しんだといわれています。その功績を讃え、敬慕を表するため、県内有志達が高浜公園（県庁北西隣）に、この功德碑を建立とのことです。篆書は有栖川熾仁（たるひと）親王、重野安繹の撰文、金井之恭書と刻まれています。

そして、この碑に纏わる事柄と楫取翁に関することを学習するうち、もっと県民、取り分け前橋市民に知って欲しいという欲求に駆られました。

出自は、1829（文政12）年、長州藩医の次男として萩城下に生まれ、藩校明倫館儒官の小田村の養嗣子となり伊之助を名のり、藩主の毛利敬親公の側近として、倒幕に向けた薩長同盟の舞台裏で活躍をしましたが、明治新政府では、なぜか中央の官職につかず、足柄県参事、熊谷県令、群馬県令、元老院議官、貴族院議員、明治天皇皇女貞宮養育係など地道な活動だったため、伊藤博文、山縣有朋など、中央政界で活躍した長州閥の政界人に比べ、地元萩でも知る人は多くはなかったとのことです。同藩の吉田松陰と縁が深く、松下村塾の塾長となり、妻は先妻寿子、後妻文ともに松陰の妹で、幕末から維新にかけ藩士として奔走し、1867（慶應3）年に楫取素彦と改名し、足柄県の参事、熊谷県令を経て1876（明治9）年に群馬県令に転じ、この赴任が結果的に近代群馬県の発展、県都前橋誕生へと繋がりました。

数多い功績のうち産業については、1870（明治3）年にわが国最初の機械製糸場が前橋藩で開業し、その2年後に官業の富岡製糸場が作られました。これを助長するため楫取翁は、県内各地を巡り製糸業の振興に努め、その後の発展に繋がったとのことです。

経済面では、当時群馬県産の生糸がわが国の重要な輸出品の一つでしたが、県内産の生糸は地方の生糸商人が横浜に運び、横浜に来ていた外国商人がそれを買って輸出していたそうです。外国商人の手を通さず直接輸出できれば利益も多くなると考えた、当時勢多郡水沼村（現桐生市黒保根町）の実業家が楫取翁に相談したところ「それは大変よいことだ。協力するから是非やってみなさい。」と励まし、国に連絡するとともに、自らも私財を補助したことにより米国に事務所を持つことができ生糸貿易が成

功し、輸出が増加することとなり、必然的に養蚕業も盛んになりました。それらを背景に、明治三農老の一人、篤農家船津伝次平の研究、実践になどにより繭の収穫量の飛躍的増加にも結びついたとのことです。

教育振興に関しては、我が国の学校教育制度の誕生が、1872(明治5)年の学制発布ですが、明治政府は、発布をしたものの、校舎の建設費や授業料などはすべて住民の負担だったため、全国の就学率は、1875(明治8)年なっても30%程度に過ぎず、教育はすぐには普及しなかった中、楫取翁の尽力で、群馬県内の就学率は著しく向上し「東の群馬、西の岡山」といわれる教育県になったといえます。

その根底には、楫取翁の日頃の活動と実情に即した学則の制定、家庭訪問の実施による就学の説得などの成果が見逃せません。逸話によると官吏が県庁を訪れると、その用件の前に「子ども達はしっかり勉強していますか。まだ、どれくらいの子供が小学校に通えずにいますか。」など教育にまつわる話をされたり、精力的に学校を巡視し、開校式や新築落成式などにも参加し、教育の重要性を説いたとのこと。

文化財保護に関しては、明治維新後、社会が文明開化の波に翻ろうされたため、わが国の良き伝統文化が軽視されたり、廃仏毀釈による美術品の流失、自然破壊などが行われ、本来保護してゆくべきものの多くが失われる憂き目にもあいました。

その様な中、楫取翁は日本文化やそれに伴う文化財の重要性を認識され、中二子古墳(前橋市西大室町)、将軍塚古墳(高崎市元島名町)などの古墳の保存整備、上州三碑(多胡碑、山ノ上碑、金井沢碑)の所在地を国有化するなどして保存に努めました。

最も、前橋市民として評価、感謝すべきことは、県都前橋の生みの親としての楫取翁の功績だと思います。名県令として親しまれた楫取翁ですが、国内、県内、市内の生糸の生産、絹産業の衰退や評価が十分に伝承されないまま長い時を重ねてきたため、いつしかその名は県民、市民の記憶から薄らいできました。

しかし、前橋市が提携している4市で唯一の国内市であり、出身地の萩市では楫取翁の評価が見直されており、平成24年9月には1ヶ月間にわたり「没後100年記念特別展 楫取素彦と幕末・明治の群像」と題した企画展が開催されました。

もともと、群馬県は廃藩置県の前には岩鼻県、後に高崎県と改められ、県庁は高崎市に置かれました。しかし、軍事上の理由により前橋市に移りました。

この後、当時の群馬県が入間県(現埼玉県)と合併し、熊谷県となったため県庁は熊谷市に置かれました。その後、熊谷県の分割に伴い再び誕生した群馬県の県庁は高崎市に置かれました。

しかしながら、庁舎が手狭であり、いくつかの課を分散していたため事務処理が極めて不便だなどの理由により、県令の楫取翁は前橋旧城の借り上げの交渉を進め、県庁は再び前橋に移されることとなりましたが、高崎市民の一部には反対意見があったため、県令楫取素彦はこの時、「県庁移転は一時的なもので、地租改正の業務が終了

すれば高崎に戻す。」と約束したそうです。

また、この頃になると前橋は政治の中心地としての機能が整いつつあることと合わせ、後に初代前橋市長となった下村善太郎翁の私財を投じての活動や多くの市民を中心とする有志の「県庁を前橋に」という運動の展開により、県庁は 1876（明治 9）年に、前橋中学本部利根川学校を仮庁舎として前橋に移りました。

そして 1881（明治 14）年正式に太政官より県庁を前橋に置く布告が発せられました。

結果、楫取翁が約束を反故にしたとして、高崎側は激怒し、あわや軍隊が出動する騒ぎとなり法廷闘争にもいたりしましたが、高崎住民の訴えは退けられました。その後も、再三県庁の移転問題が再燃したものの、ついに県庁が高崎に帰ることはなく現在に至った次第です。

以上のように、楫取素彦翁は前橋にとって正に、県都前橋の生みの親であります。

今回の学習を通して、ふと思いつき残念に思うのは、上毛かるたに取り上げられなかったことです。確かに本県の出身ではありませんが、貢献度からしたらおよその他の偉人にも引けを取らないと思われます。

近代群馬の発展に大きな功績を残し、県都前橋の誕生にも貢献し大河ドラマ「花燃ゆ」で全国的に有名になった楫取翁を顕彰する銅像が 2016（平成 28）に前橋公園芝生広場にある功德碑の隣に設置されましたので、一度ご覧いただければと思います。